

平成 1 5 年 9 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 0428-23-6859)

## 狭いところに 1 4 の住居跡

### 下内遺跡の発掘調査が終了いたしました。

青梅市畑中一丁目 4 2 番地先、下内（したうち）遺跡の発掘調査が終了いたしました。

この遺跡は、万年橋を渡り切った、青梅市畑中一丁目交差点の河岸段丘上段と下段に位置し、地元では古くから知られていた遺跡です。

過去には、昭和 4 2 年、現吉野街道の改修工事により、上段のほぼ半分が削り取られ、釜の淵公園の河川敷駐車場に埋め立てられました。また、下段では昭和 6 3 年、マンション工事に伴う第 1 次調査が行われ、平安時代の住居跡が発掘されました。そしてこのたび、下内交差点の拡幅工事に伴う事前調査を第 2 次調査とし、西武バス駐車場土地改良工事に係わる発掘調査を第 3 次調査として行われ、下内遺跡のほぼ全貌が明らかになりました。

それでは、第 2 次調査から紹介いたします。

まずこの調査は、昭和 1 3 年 1 0 月に下内交差点から西方向へ吉野街道両脇を対象に試掘調査を行い、その結果を基に、平成 1 4 年 1 月 2 8 日から 3 月 2 9 日まで、道路南側の段丘上、幅約 7 メートル長さ約 3 8 メートルにわたって本格調査が行われました。

その結果、調査区域の東側から、長径約 5 . 4 メートル、短径約 4 . 4 メートルの不正円形の住居跡が 1 軒発見されました。この住居跡の中央北側寄りには、石で囲まれた炉を設け、炉の中には縄文土器が作為的に埋められ、その縄文土器の文様が縄文中期前半末、勝坂式土器に分類されることから、今から四千数百年前のものであることが判明しました。

このほかの遺構では、単独での石囲埋設土器 1 基（住居跡の炉と思われる）、集石遺構 9 基（石を加熱して物を焼いた跡など）、土坑 7 基（お墓の跡など）も発見され、土製品では破片を含めた縄文式土器 2 千数百点、土製円盤 2 点、石製品では打製石斧 6 0 点を含む 1 8 4 点に及ぶ石器類が発見されています。

また、区域の最西端では、隅丸の長方形をした平安時代前期、9世紀後半～10世紀初頭と推測される住居跡（長軸3.7メートル、短軸2.4メートル）が1軒発見されました。住居跡の北東の隅にはカマドが設けられ、延長1.4メートル幅0.9メートルにわたり、構築材の粘土が崩れた状態で発見され、その遺物は破片を含めての土器片が236点あり、そのうち、個体としては須恵器坏が2点ありました。

次に、第3次調査は、西武バス㈱から委託されて行われたもので、第2次調査南側と直結し、新旧吉野街道に二辺を囲まれた、調査面積約386平方メートルに及ぶ全掘調査です。

期間は、平成14年8月26日から11月8日まで行われ、縄文時代中期中葉から中期後半の遺構が確認されました。

調査では、住居跡と確定できるもの5軒、炉跡が無いなど、住居跡の可能性のみとなるもの7件、集石遺構8基、土坑14基などが確認されました。この発掘に伴い、膨大な量の土器類の多くが勝坂式から加曾利E、加曾利E式に分類され、まれに、勝坂型式より古い阿玉台（おたまだい）型式や、後期に類する堀の内型式なども見つかっています。これらの土器は浅鉢や深鉢の破片で完形品は無く、中には特殊な土製品として、土製円盤が20点前後、土器などを乗せるために作られたと推測される台状土製品が5点出ています。また、石製品では磨製石斧10点前後、今までまったく見つからなかった石鏃（チャート製）が2点、石器製作時に調整用に利用されたとされるハンマーなども見つかっております。

以上のように、下内遺跡は縄文時代中期中葉から中期後半、そして9世紀後半から10世紀初頭における平安時代の遺跡であることが確認されました。

第2次調査で確認された石囲埋設土器を住居跡炉と考えると、第3次を含めた発掘総面積約652平方メートルの地域には、建て替えされながらも14軒もの縄文時代の住居跡が密集した状態で確認され、すぐ付近には集石遺構、そして墓穴とされる土坑などが若干の年数を隔てながらもひしめきあって作られていたことがわかりました。

今回の発掘により、従来からの下内遺跡の全貌はほぼ確認されましたが、この地域から南方へ、そして西方へと広がる可能性はまだまだ充分考えられます。これからの調査によっては畑中神社まで続く台地に原始、古代の生活の場が新たに見つかる可能性を期待しています。

（文責・鈴木晴也）